**F-2**　（個人発表　6 月 12 日(土)14:30～14:55　N321 教室）

# 使えない貨幣と人の死

**深田淳太郎（日本学術振興会）**

パプアニューギニア、東ニューブリテン州に居住するトーライの人々は、タブと呼ばれる貝殻の貨幣を婚資の支払いや葬儀における象徴財、男性秘密結社への加入の手続きといった儀礼的な目的から、日常的なものの売買の際の交換媒体としてまで幅広い用途で使用してきた。また近年では、タブは州政府の政策によって、パプアニューギニアの法定通貨であるキナを補完する第二の通貨として認められつつある[深田 2006]。

タブのように法定通貨の地位まで得ようとしている事例はめずらしいにしても、メラネシアの諸社会では古くから、そして現在でも石や貝殻、鳥の羽などを素材とする自生通貨(indigenous currency)がさまざまな用途で使用され続けている。このような自生通貨をはじめとする種々の交換が、社会の広い範囲において、極めて盛んに行なわれるということから、メラネシアにおいては、モノが絶え間なく人々の間を交換され続けることによって社会が生成されているということはしばしば論じられてきた。近年においても、たとえばエイキンとロビンスは、「メラネシア社会の最も基本的な性質は、交換が人々の生活を活性化し、社会を構築する原動力となっている」[Robbins and Akin 1999]と論じ、貨幣が流通に注目することで現在のメラネシア社会における文化的アイデンティティやエイジェンシーの感覚にアプローチすることを試みている。

盛んに行なわれる種々の交換や貨幣の流通によって生成される関係性が、社会を構成する重要な部分を担っているということは、本発表において取りあげるトーライ社会の貝貨タブについても同じように言えることである。実際に先述したように、トーライの人々はタブであらゆるものを購入し、また儀礼においタブを交換したり展示したりすることで、さまざまな関係性を形成し、社会的な権威を誇示する。まさに彼らは、貝貨タブを、広い範囲に絶え間なく循環させることで多様な関係性を作り出しているといえるだろう。このような見方がトーライ社会を理解するうえで、きわめて有効な視座であるということは間違いない。しかし本発表では、あえてそれとは異なる点に注目して貝貨タブと人の関係のあり方を見ていきたい。

上の視座では、人と貨幣のあいだの関係について、人が貨幣を使い、貨幣は人に使われるということが前提されている。これはごくあたりまえのことにも思えるが、本発表で見ていきたいのは、貨幣と人のあいだのそうではない関係のあり方である。それはすなわち、人が貨幣を「使わない」あるいは「使えない」という状態である。貝貨タブが流通せずに、人と人とを関係付けるのではなく、特定の個人との関係の中にのみ留めおかれる。そのような側面に注目してみたい。

貝貨タブはバラバラの貝殻、数珠状などさまざまな形態を取るが、その中の一つである「ロロイ」は他の形態のタブのようには「使う」ことが出来ない。モノを買うこともできず、婚資の支払いなどに用いられることもない。ロロイはただ保有するだけのものである。しかしトーライの人々は懸命に働き、その使えない貨幣を大きくしていくことに一生涯を費やし、そして死んでいく。使われ、流通することで社会を作り出すはずの貨幣がここでは使われることなく、しかし特定の個人の一生涯との深く関係している。

貨幣の流通に代表される絶え間ない交換によって形作られるメラネシアの社会および個人のあり方は、それとは逆の貨幣の「使われない」、「使えない」側面に注目するとどのようなものとして見えてくるだろうか。本発表ではフロイトや柄谷行人のフェティッシュをめぐる議論を参照しながら、「使えない」貨幣であるロロイとトーライ人の一生の関係に注目し、この問題について考察していきたい。

**【参照文献】**

**深田淳太郎**

2006 「パプアニューギニア、トーライ社会における貝貨タブをめぐる現在の状況」『くにたち人類学研究』第1巻、pp.1-22。（http://hdl.handle.net/10086/15636）

**フロイト、ジークムント**

1997（1940）『エロス論集』中山元 編訳、ちくま学芸文庫。

Robbins, Joel and David Akin (eds.)

1999 *Money and Modernity: State and local currencies in Melanesia*. Univ of Pittsburgh Press.

【 貝貨、死、フェティシズム、所有、メラネシア 】